

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報

2008年 冬号 1月9日発行／季刊

発行人：進藤 禮治郎

連絡先：府中市日新町 4-5-24

TEL 042-366-2134

多摩川 陽はまた昇る

てづくり
多摩川にさらす手作さらさらに

なに かな
何そこの児のここだ愛しき

(万葉集3373)

「川に入って布(手作)を曝しているあの児。見てると益々愛しくなるなあ。何でこんなに愛しいんだろう・・・。」

明るい、爽やかな、乙女への恋心が河原をわたる春風のように、胸を吹きすぎて行きます。ご存知、万葉集の東歌です。

それから1300余年。あれはいつの日のことだったでしょう。その日も、多摩の河原は、秋の陽の光につつまれ冷たい川の水は、甘く澄みわたって流れていました。傍らの先輩がふと洩らしました。「俺が、学徒兵で戦地へ行く前のこの河原にも、やはりナデシコが咲いていた。忘れられんなあ。」川の流れとともに、静かな時間が過ぎて行きました。

そして今。私たちは、50年前、1300年前の若者たちの心根と、確かに向き合うことは出来ます。でもその舞台であった多摩川は、何と変り果ててしまったことでしょう。

これも、現代の都市河川の宿命として片付けられるのでしょうか……。

でも、もう一度目を凝らせば、ナデシコも、ワレモコウも、ツリガネニンジンも外来植物に負けそうになりながら、まだ生きています。春はヒバリが囀り、夏はセッカが忙しいのです。休日には、雑踏を逃れて、多くの人々が河原で憩っています。若い二人連れもいるのです。

今年も、多摩川に初日が注ぎ、河原の木々は梢まで光り、多摩の横山は、

オレンジ色に染まって、原初と変らぬ美しい夜明けを迎えました。そして万葉の若者の、出兵を前にした若者の、切々とした思いの強さも、今朝の陽の光りのように、この地表を真実の姿として、流れ続けているはずです。

そして私達が、この自然と人間の心の真実から目をそらさぬ限り、醜く変形した現代の風物に抗って、本当の人間の在りかを求めつづける「力」は、きっと生み出されて行くのでしょう。私達の都市河川多摩川が、人々の力と叡智によって新しく生まれ変わる日も、もうすぐなのかも知れません。(梶島弘通)



冬枯れで小さくなった川面に太陽の光が届いた多摩川の夜明け
(是政付近の「府中多摩川がぜのみち」から撮影/詔浩道)

Citizens' eye
Watching...
市民の目

⑫

新しく完成したモデルロード

市役所裏近辺の道路は完全バリアフリー化され歩道もあるすばらしい道路に生まれ変わり、住民、歩行者から大変喜ばれています。市の話では、大国魂神社近辺を美化するため住民の希望も入れたモデルロードとのこと。しかし「市民の目」から見ると、車道が狭いため車と自転車が出会い頭に接触する危険性などが考えられます。道の入口に注意を促す看板等が必要ではないでしょうか。

写真は市役所裏に整備された道路



府中市のごみ問題解決のために

荒木 茂 / 竹田 勇

1. はじめに

ダストボックスの維持を公約した市長から、昨年7/1広報で戸別回収有料化への方針転換が示され、同年7/21広報で「ごみの収集方法の見直し」が掲載された。われわれ市民は、年初頃から噂程度に聞いていたとはいえ、突然の確定的な発表で驚いた。市民レベルまで降りていなく拙速だとして実施時期は延期された。必要なことは回収方法の変更ではなく、ごみ減量であり、正しい分別である。

ここでは、利便性に優れたダストボックス方式の下でのごみ減量方法について検討するが、内容の多くは回収方法に関係なく有用である。市民の約半数以上は集合住宅に住んでおり、戸建てに対するような戸別回収は難しいことも指摘する。

2. ごみ焼却の自区内処理

人口約55万の八王子市は3カ所、多摩市・日野市はそれぞれにごみ焼却場を保有している。約25万人の府中市もごみ焼却施設建設を至急検討すべきである。昨年7月に出された戸別回収有料化も、H19年3月の「二枚橋衛生組合」ごみ焼却場の閉鎖が関係している。ごみを自区内処理することで、分別やごみ減量の大切さが実感でき、行政は市民とともに、本気でごみ問題に取り組む体制が出来ると考える。昭和59年に建設された武蔵野市ごみ焼却場は近くに住宅があり設置までに大変な苦勞をしたことで、市民参加型の行政を作ることが出来た。これは、市民の意識改革を図ることがごみ減量に何より必要で、極めて重要なことである。

3. 市民が主役ごみ改革

ごみ50%減量のポスターは「みんなが主役ごみ減量」と書かれている。ゴミ減量や正しい分別には、市民の協力は絶対条件である。ここで注意したいのは、「みんな」ではな

くて「市民」である。生活に密着した「ごみ収集方法の見直し」は、市民が主役でなければならない。市民によるごみ収集システム改革案を作らなければ目的は達成できない。日野市はH7と9年に「ダストボックスの廃止、収集方式の有料化など」の答申が出たが、市民合意が得られなかった。H11年には、「環境基本計画」を市民と行政の協業作業で策定するため市民参画を呼びかけ、109名の市民と検討を行い「収集方式の変更・有料化」などについても議論した。市民の言葉をそのまま計画にし、再度審議会に図り議会で承認され、現在の戸別回収有料化がH12年10月から実施された。ここで指摘したいのは、日野市民の場合、環境意識が高かったこと、ボックス設置数が人口比で府中市の半分しかなく、市民も不自由していたことである。市民の理解を得て、日野市は大幅なごみ減量に成功した。

4. 他市との比較

昨年7月21日広報で他市との比較が示されているが、筆者の観点で実情を分析する。表に示すように、戸別回収有料化を実施している調布・日野市に比べ、大幅に可燃ごみが多い。調布市の不燃ごみが少ないのは、容器リサイクル法でプラスチックは資源ごみ収集されており、直接の比較は出来ない。現在府中市のプラスチックは、資源として、リサイクルプラザで分別されている。不燃ごみ中の比率は約6割と聞いており、資源プラを除くと45g/人日となり調布市と差はない。資源ごみを含むごみ総計で見ると、当市が多いが調布市との差は大きくない。府中市発表の他市や事業ごみからの不法投棄が2割とすると、可燃不燃ごみ計で、120g/人日という膨大な量となることになり、それだけで当面の目標1万トンごみ減量が果たせ、ごみ総量でも日野市と同等の値となる。可燃不燃の内容は各市各様であり、呼び方も「燃やすごみ、燃やさないごみ」などもある。

近隣市との比較

平成17年度ごみ	単位: g/人日		家庭ごみのみ				
平成17年度	可燃	不燃	資源	粗大	有害	総計	可燃不燃計
府中市	487.6	110.9	113.5	20.4	1.0	733.3	619.8
調布市	370.3	49.1	285.4	17.2	1.3	723.4	438.0
日野市	355.4	92.4	201.4	18.6	1.4	669.1	497.7
八王子市	374.7	93.3	152.0	10.2	0.8	631.1	479.1

資料: 財団法人 東京市町村自治調査会 平成17年度版「多摩地域ごみ実態調査」より抜粋

プラスチック扱い(PET・PE除く)	府中市	調布市	日野市	八王子市
H19年	不燃ごみ	資源ごみ	不燃ごみ	不燃ごみ
	施設で資源ごみ抽出	但し一部不燃ごみ	但し資源化試験中	

筆者は「府中かんきょう塾ネット」にも所属

個々の数字だけの優劣は間違いを起こすが資源ごみ含む総量比較はごみ減量への成果を反映している。

5. ごみ減量優良市の取り組み

当市の当面する最も大きな課題は、正しいごみ分別と不法投棄対策である。武蔵野市や八王子市は不法投棄を厳しく取り締まっている。2割と自称する府中市も悪質な不法投棄は厳罰にし、八王子市のように市民通報を加えることを提案する。八王子市担当課員からは、「市職員自らごみ収集を行い、分別が悪ければ回収しない、戸建てや集合住宅には市職員が注意指導することであり、ごみ減量には秘策などなく、地道な取り組みのみ」と言われた。ごみ専用の広報紙「リサイクルプラザ八王子」の年2回発行と市広報紙に多くの紙面を割き、啓蒙活動を行っている。

集合住宅優良集積場の認定、エコショップの認定などインセンティブを実施するなどの施策を行い、50万以上の都市で全国一位の輝かしい実績を上げている。八王子市の資源ごみはステーション回収を実施していることを付記する。

日野市は世帯別の責任を明確にするため、集合住宅居住者に名前を記入させている。分別が悪ければ回収しない。購入者と売る側で協議会を組織し、ごみ低減への協力を要請している。生ゴミ堆肥化容器の半額販売を通年行っている。エコタウン紙を年3回発行している。今後、プラスチックの資源化、事業ごみの削減運動を予定している。この2市の取り組みは大いに参考になる。

6. ごみ減量

府中市は特に可燃ごみの分別が悪い。資源ごみの古紙や布、ペットボトルなどのほか不燃ボックスに投棄すべきものも混入している。これらに対しては、更なる啓蒙活動による当該ボックス使用者の意識向上と市職員による指導監督強化を図るべきである。使用者全員が悪くない場合も多く、特に分別不良ボックス使用者には、市職員による強制力のある調査指導が不可欠である。分別不良が特に目立つ4～10世帯の集合住宅は単身者が多く、管理者・家主など管理責任者の責務を明確にしつつ、ボックス設置場所を義務づける。人口比で40%を越える大型集合住宅は、自治会または管理者・家主の管理責任を明確にする。すべてに対しインセンティブと回収拒否などにより、分別の徹底を図らせる。

ごみ総量を減らすうえで、ごみを家庭に持ち込まないことは最重要である。購入者も心すべきは勿論だが、事業者の協力も欠かせない。市民意識の向上と、事業者や個人にインセンティブを与える等の方策を市が立案実行すべきである。食料品や雑貨に限らず、電化製品や部品、衣類、薬ほか、あらゆる商品が店頭で素早く袋に入れられる。断る間もないくらい素早い。断ると嫌な顔をされ、面倒くさそうにシールを貼る。店頭回収も大きな効果があり、回収箱の設置を義務づけ家庭への持ち込みとボックスへの投入を抑制する。



抽象的なスローガンだけが先行している府中市のゴミ改革

生ゴミは水切り乾燥化を奨励する。遠心分離式や乾燥式水切り機へ補助をする。分別と乾燥化が徹底できれば可燃ごみは半減できる。残った生ゴミは堆肥化などを奨励補助する(十分な予算確保が必要)。また、大量発生事業所、スーパー、生鮮食料品店、飲食店、学校、霊園などの生ゴミは資源化に協力させる。市民農園に堆肥化施設を設ける。大型集合住宅に生ゴミ処理機の設置を奨励する。剪定枝木や落ち葉などの資源化は「水と緑の府中市」の必須課題であり早急な取り組みを市にお願いする。

7. 不法投棄と利便性向上

不法投棄は他市住民であろうと、自市の事業者や市民であろうと取り締まる必要がある。罰則と市民の監視が欠かせない。ボックスに鍵(単なるフック)を掛ける、ビン・缶回収箱は前日の夜に設置する。筆者の体験で不法投棄には大きな効果がある。ボックスの利便性を求めるなら、この程度の不便は忍ぶ必要がある。現在行っているプラスチック3週、その他不燃1週の方式は地区によりごみが溢れ美観を損ねるばかりか、可燃ごみボックスへの不燃ごみの投棄や不法投棄の温床になっている。不燃ボックスを2室式にするか、量の少ないその他不燃は資源ごみと同時回収するとか、危険物として回収すればどうか。不燃可燃ボックス数比の適正化も効果がある。

8. まとめ

現状のごみ半減目標は中身が伴っていない。このようなやり方で、ごみ廃棄をして欲しいという具体方法が市民に徹底されていない。市職員が率先し説得に当たる。あらゆるメディアや、自治会・町内会などの場を活用して市民に具体的に訴える。ダストボックスは府中市に唯一残る利便性に優れたシステムである。まず、上記の改善策を行政も市民とともに減量化に懸命に努力する期間を設けて欲しい。現状のダストボックス方式での改善にしる、戸別回収有料化にしる、市民意識を変えない限りごみ減量は限定的である。それには市民中心の改革議論の場が必須である。

第2回 国分寺崖線保全再生フォーラム開く

つないで守る・結んで育む、緑と水の風景づくりをめざし

昨年の世田谷区に続いて、第2回フォーラムは昨年11月10日、国分寺崖線の自然環境や景観を保全・再生するため、崖線沿いの国分寺市、小金井市、世田谷区をはじめとする自治体関係者と市民約200名の参加により東京経済大学(国分寺市)で開かれました。午前は「崖線を楽しむウォークラリー」で湧水と野川を回り、午後は基調講話と対談、活動事例紹介、パネルディスカッションが行われました。最後にフォーラム宣言を満場一致で確認しました。午後の部の一端を報告します。

基調講話は国分寺市在住で建築史家として知られる東大教授藤森照信氏が「国分寺崖線を彩る建築と庭園を楽しむ」と題して、今は「都立殿ヶ谷公園」となっている岩崎家別邸など大正から昭和初期、資産家が都心から近郊農村(崖線周辺)へ進出した経緯や生活など建築史を切り口にユニークな報告がありました。

引き続き藤森氏を含む星野国分寺市長、稲葉小金井市長、関口国立市長が登壇「緑の回廊 崖線と豊かに暮らす市民の知恵・地域の知恵」をテーマに対談が行われました。50年前、子供時代の崖線や湧水の思い出・生活体験やまちづくり、地下水保全の現実課題に触れるなど、和やかな中にも市民と共に進めたいとの考えが披瀝されました。

なかでも私が注目したのは国立市長の発言です。それは青柳崖線のママ下湧水公園で池を造成し、湧水環境と魚類調査、矢川のホタルの里づくりを紹介されたことです。国立市域のママ下や矢川湧水は府中市まで流れ込む貴重な水資源です。“水と緑の保全”は国立・府中両市の共通課題であり、行政は勿論のこと市民間の連携、協力も欠かせません。青柳崖線の話をお聞きしながら今後、府中崖線フォーラムでも開けないものかとの思いが沸きました。

次回の開催地に話題が及んだ折には、小金井市長が引き受けを表明する場面もありました。

休憩・パネル展示を挟んで3団体(世田谷区、小金井市、国分寺市)の活動事例紹介があり、最後に早大教授伊月盛夫氏のコーディネーターで副題に掲げたテーマでパネルディスカッションが行われました。内容は割愛しますが、パネリストには(財)世田谷トラストまちづくり課長、国分寺市都市計画担当部長など自治体職員をはじめ、住民組織代表や専門家等6名が登壇。地道な実践で得られた活動には説得力があることを実感しました。

府中から今回のフォーラム参加者は私も含めて2名だけのようです。国分寺・府中崖線を有し、まちづくりの基軸に位置づけていることを考えれば、府中からはもっと参加し、討論に加わってほしかったです。他市の取り組みや多様な市民活動の経験に学ぶ絶好の機会です。来年はぜひ、みなで参加しませんか。

《フォーラム宣言》

1. 国分寺崖線保全のため各自治体の施策を連携させよう
…〈自治体の連携〉
2. 緑と水の保全活動を一体につないでいこう
…〈人と人の連携〉
3. 国分寺崖線を通して生き物のつながりを守り育もう
…〈生態系の連携〉
4. 自然再生のまちづくりを展開させよう
…〈地域空間の再生〉
5. 国分寺崖線を風景資産として保全再生しよう
…〈景観と歴史の再生〉
6. 次世代の子どもたちに学び、体験の場に活用しよう
…〈環境教育・追加〉

(進藤礼治郎)



写真は藤森氏と星野国分寺市長、稲葉小金井市長、関口国立市長による対談

田んぼの学校が収穫祭



る昨今、農薬1つとっても課題が多く、農家のご苦勞を少しでも知る事ができたように思います。春から始まった全6回の田んぼの学校でしたが、雨が降ってもお天気が悪い時でも、毎回早くからいらして準備をしてくださる市民の方や農工大の方には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。どうもありがとうございました。

(荒井実佐子／保護者)

楽しかった米づくり

たうえの時は、土がぐによくよんで、くつしたもはいていたから足がきもちわるかったです。でもすごたのしかったです。バケツいねで、そだてるもたのしかったし、ひろい田んぼで、そだてるもたのしかったです。いねのせいちょうをはかりに行った時は、虫とりもたのしいし、みに行くもたのしかったです。こうゆうふうにおこめがつくられるのもしらなかつたし、あうゆうふうに、はさかけというやりかたをしらなかつたです。(小松 りさ／聖徳学園1年)

いねかりが楽しかった

ぼくは今年で2回目のさんかです。なぜかというときょ年とも楽しかったからです。きょ年は田うえができたけれど、今年はいんどう会があつたので、できませんでした。さんねんです。でもかかしづくりが楽しかった。かかしをつくるときはぼうを十字にくんでつくるのがわかりました。1ばん楽しかったのがいねかりです。いねかりのとき雨がふっていて、レインコートをきてかるのがむずかしかった。どろも、ねちよねちよしていました。いねがぬれていて、かまで切ろうとするとすべって切りにくかった。らい年も行きます。(青木 けい／府中第三小学校2年)

息子(小2)と一緒に貴重な体験

2年前にこちらの府中に引っ越すまでは、周りにあまり自然がない所で育った為、私にとっても今回の体験は非常に新鮮で興味深いものになりました。始めは虫取りが目的だった息子も後半は熱心にとりくみ、自ら学校の“自然発見”の時間に皆の前で発表するなど、息子にとって大変貴重な体験ができたことを実感しております。私自身も田んぼにおける生き物の生態を知ったり、食の安全がさげばれてい

田んぼを残して

3年目を迎えた田んぼの学校は農工大学の本町農場で子ども、大人の40名で昨年5月末に開校しました。田植えから稲刈りまでの農作業と生き物観察で、前回好評の「バケツ稲」を今年も準備したところ多くの方が自宅で米づくりにチャレンジしました。また今回新しい試みとして、カシ(案山子)を作ることになり、子ども中心に見事なカシが2体が出来ました。これで田んぼの雰囲気も盛り上がり、田んぼ近くを通行される市民も楽しまれたようです。

10月27日の収穫祭・修了式は、台風が近づく悪天候でしたが、中央文化センターに多くの子ども、保護者が参加しました。スタッフと一緒に会場の飾りつけ、そして自分たちで作ったお米でおにぎりを作りました。炊き込みごはん、サツマ芋ごはん、雑穀米の3種類のおにぎりを作り、おいしく頂きました。その後記録ビデオ上映、子どもと保護者から感想を話してもらい、最後に農工大生が作った、すばらしい修了証を渡しました。

感想発表で、子どもからは、田んぼの学校で、お米の大切さと、田んぼに多くの生き物がいる事を知ったこと。保護者からは子どもとともに米づくりを体験し自然観察をはじめ、いろんなことが学べた。市内の田んぼは残し、田んぼの学校は続けてほしいなど、率直な声がありました。

(五十嵐 四郎)



バス
見学会

あきる野市のバイオマスタウン

秋川渓谷と豊かな緑は都会人を引きつける魅力がある。あきる野市は、地球環境問題と取組むバイオマスタウン構想を策定し村おこしを始めた。このことを農工大報告書で知る。環境と経済の好循環を目指して、地域住民、事業者、大学（農工大）及び行政が一体となって取り組んだのだ。その中心が「瀬音の湯」という湯浴施設で、紙すきと陶芸体験ができる「あきる野ふるさと工房」、微量要素を含む農産物の栽培などもある。

今回の「バス見学会」は圧倒的多数であきる野市に決まった。それは、「バイオマスタウン構想」という名前がわれわれ環境市民団体には魅力的で、地元農工大が参画して行ったこと、清流を眺めながらの湯浴施設が体験できる等の理由で賛同を得たのだろう。



製材の端材を燃焼させて加温しているバイオマスボイラーの投入口（上）

小型ながら排熱発電するスターリングエンジン（左）

秋川渓谷をはじめ訪れた私には、秋川の清流と森林に囲まれた緑豊かな東京都の片田舎で、もうこれだけでキャンプや散策など都民の憩いの場として充分存在価値があると思われた。そのうえで巨額の資金を投じて「バイオマスタウン構想」を策定し、湯浴施設を建設して村おこしをする必要があったのかと疑問をもった。しかし、かつては薪炭、木材の生産・流通の首都圏経済の中心地であったが戦後の高度経済成長を経て、旧五日市町は過疎化して地域社会の弱体化を招いた。そこで、首都圏周辺部という立地条件、現在の地球環境問題に貢献するグリーンツーリズムを担う条件整備を行い、元々豊富な木質バイオマスを活用した木材活用及び再生可能なエネルギー生産・利用等の先進地域として、再活性化する方向を選択した。これが「バイオマスタウン構想」の基本姿勢であり、その中心が湯浴施設「瀬音の湯」である。市の担当職員から説明・案内を受ける。秋川渓谷を見下ろす山の中腹に建設された施設は延床面積が2,404㎡もあり、内部には、浴室、レストラン、カフェ、研修室、物品販売所、バイオマスボイラー室、野外には、足湯場、コテージ6棟、駐車場がある。



一番の目玉はバイオマスボイラーで、ガソリンやディーゼルなどの化石燃料を使わない地元で排出される廃材を燃料としている。しかも排熱を利用して発電するスターリングエンジン（注）を導入していること…こここのところが農工大の調査・研究の成果で、世界でもまれな製品で、その意味では、先進的試みである。このボイラー＋スターリングエンジンの組み合わせは山間地帯の木質系の分散型発電には推奨できるが、都市の廃棄物にはガス化＋大型火力発電が適する。この話を聞きながら、厄介者扱いしている可燃ごみ…特に生ゴミはバイオマスではないか。自区内処理場を建設し、このバイオマスを飼料に、堆肥に、メタン、エタノールに変え、廃熱利用（暖房、発電）する地元府中になってほしいと思った。

地域活性化で期待されるバイオマスタウン

「バイオマスタウン構想」の中身は燃料を石油でなく廃材を採用しただけなのか、と極論してはいけないと思う。上記の基本姿勢から「あきる野ふるさと工房」が開業され、都心の港区が排出するCO2をあきる野市の森で吸収する目的で「港区民の森」として、同区民が管理する協定が結ばれた。これまで無駄に廃棄・焼却されてきた木質バイオマスの60%近くが湯浴施設の熱源、発電に利用される。その他、森林の適正管理が進み、水源の涵養が促進できる等の環境保全、地域の林業の活性化はもとより、湯浴施設の中心とした観光施設への来訪者の増加により地域の活性化が期待される。

当日は好天に恵まれ、秋川の清流と緑がまだ鮮やかな森林に癒され、アルカリ泉の露天湯と冷泉に浸りながら渓谷を眺めたり、浴後の渓谷沿いの散策や工房での体験など、あきる野市の魅力を体験できた。（竹田 勇）

（注）農工大21世紀COEプログラム「新エネルギー・物質代謝と「生存科学」の構築」最終報告書 2007年3月、p. 74に詳しい。

援農ボランティア体験記

中 沢 花 織

調布に生まれ育った私ですが、なんだか自分は「府中の子」である気がしてなりません。

思い出すのは、夕焼けの多摩川や雑木林、田んぼ、畑、その間をぬける道に、でこぼこあぜ道。なんのことはない、でも大切にされてきた府中の地が、どうやら私の原風景のようなのです。そして、いつもの田んぼや畑が、宅地や駐車場となつて一瞬にして消えたあの悲しさは、なんとも言えないものであったことも思い出します。

そんなこの地への感謝と、原風景への思いをもって、援農ボランティアに参加しました。

押立の市村さんの畑は、まさに私が(勝手に)遊びまわって、見つめていた畑です。それだけで嬉しく、また作業もとても楽しくやらせていただいています。草を取ったり、ネギを植えたり、トマトのビニールハウスの片付けなどもしました。どれも難しいことではないけれど、なんにでも工夫は必要です。援農を続けてこられた方々は、何十倍もうまくできます。市村さんの方が何百倍もうまくできます。常に考え、工夫し、体を動かし、汗をかく、そして喜んだり悲しんだりする。学校の授業に行く前のこの朝の2時間が、机の上の勉強よりどれだけ私の糧になるのでしょうか。さらに市村さんや皆さんとのお話も楽しく、自分ももっと経験し、勉強し、楽しもう！と思える時間となっています。



2007年11月の「収穫祭」で市村良知さん(右)と並立つ学生の中沢花織さん(押立の市村宅さんの庭先で)

自分のところで食べ物を作れない、環境が悪いなどと言われる我が故郷東京ですが、都市近郊で一生懸命に働かれています。そのお手伝いをしながら、東京でもどこでも、自分の生きる地とその環境を守るのに、少しでも自分の力を出せることは幸せなことだと感じました。

私はつい最近、生まれ育った調布、府中を離れました。改めて、大好きな土地がいつまでも美しく、元氣であってほしい、そう思います。

府中の地と、府中の皆様ありがとうございました。どの地へ行っても、この原風景への思いと実践を生かしていきます。

ハケと水路の原風景をめぐる市民調査

崖線や水路網を活かしたまちづくりは府中市の重点施策にも位置づけられています。同時に、現在、水と緑のネットワークの事業として健康センター周辺の拠点整備も着手しています。

府中かんきょう市民の会は、さきに農水省が府中用水を「疎水百選」に選定したことに加え、都からも府中用水の保全と活用が期待されていることから昨年12月5日に「ハケと水路の原風景をめぐる市民調査」を実施しました。東京農工大水資源計画学研究室や水土里ネット東京とも共催するなど、専門家の

ご協力もいただきました。

調査は、府中用水の集水域として新田川上流部、西府崖線と湧水地の広い範囲を調べました。

結果として、ホタルの幼虫のカワニナの棲息確認や湧水量と下水への放流の把握、湧水枯渇の状況などの問題点も判明し、今後、府中市が府中用水源流域の保全と活用を進めるうえで、市民側からの提案の足がかりを得ることができました。この調査には11月29日の事前調査も含め、22人が参加しました。

(進藤礼治郎)



府中市域の鳥たち

大澤 邦男

府中市域は日本野鳥の会の探鳥地が2箇所あり、野鳥観察をするには恵まれた環境にあります。

多摩川流域では聖蹟桜ヶ丘駅から交通公園にいたる河川敷を下流方面に下り、多摩市が設置した野鳥観察小屋付近までのコースがそのひとつです。

川の宝石といわれているカワセミが一年を通して見られ、野鳥を観察するには最適な場所です。特に冬は、猛禽類のオオタカ、ノスリ、ハイタカ、ハヤブサなどが観察でき、関戸橋の橋脚にはチョウゲンボウが営巣し、毎年雛が誕生しています。

一方、最近のカモたちの姿が減少して、あまり見られないのが気がかりです。

またもう一つは多磨霊園・浅間山公園です。春や秋の夏鳥の渡り時期には、多くの野鳥愛好者やカメラマンが多磨霊園に集まり、特に、通称5区公園には、春はツツドリ、キビタキ、オオルリなど、秋になると、今度はエゾビタキ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリなど、多くの夏鳥の中継地として賑わいを見せています。

府中市域では年間で100～110種類の鳥たちを観察することができます。

かんきょう市民の会では、市の委託事業として、郷土の森正門前～いこいの森～大丸堰～読売新聞社前信号での定点観察を毎月1回実施しています。



セッカ



カワセミ

2006年4月～07年3月までの一年間では、53種の鳥たちを観察することができました。秋の渡りの時期はノビタキの姿が見られ、年間を通じては、ヒバリ、セッカ、ホオジロなどの姿が多く見られます。

自然観察は継続して実施して、必ず記録に残すことにより、ある期間の変化がわかります。私達の記録が、5年、10年後に生かされる事を期待して今後も観察を続けたいと思っています。

市民ボランティア環境調査

市の委託事業の、「市民野鳥観察会」を、今年も多摩川で行います。皆さんの参加をお待ちしています。

日 時 2月3日(日曜日)9:00～12:00

集合場所 郷土の森正門前 9:00

対象 市民 定員 30名

双眼鏡・図鑑のない方は、申し込みの際申し出てください。

雨天の場合は2月10日(日)に延期いたします。

申込み及びお問合せ

電話で環境保全課公害係 335-4196へ

定点観察に集う「府中かんきょう市民の会」のメンバー

